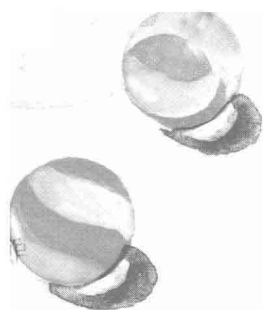


雲の階段 渡辺淳一



雲の階段

渡辺淳一



雲の階段

一九八二年一月一六日 第一刷発行

一九八二年二月二二日 第三刷発行

著者——渡辺淳一

© Junichi Watanabe 1982, Printed in Japan

発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二三(大代表)

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

振替東京六一五〇

定価——一、二〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えます。

ISBN 4-06-200054-7 (0) (文1)

目
次

南	潮	波	夕	風	紺
風	騷	濤	凧	雲	碧
176	150	110	79	39	7

陽	春	霧	流	小	乱
炎	雷	冰	星	春	雲

366

338

308

287

255

229

装 幀 原 万 千 子

雲の階段

紺碧

「アクロ、アクロ」

大きな声が廊下の先できこえる。その声をきくと、職員達はまたヒゲが呼んでいると思う。

ヒゲというのは、この診療所の村木所長のことである。鼻の下に大きな八の字のカイゼル髭を生やしているので、職員達は陰でそう呼んでいる。

所長は髭もさることながら声も大きい。五十五歳にもなれば、もう少し落着いた声を出しそうなものだが、声の大きいのは生来のものらしい。

廊下で呼びとめられた男は振り返り、すぐ所長の立っている診察室の前に戻ってきた。

「昼からアツペだからな、頼むぞ」

所長にいわれて、アクロと呼ばれた男は大きくうなずいた。

この男の本名は相川三郎という。アクロというのは所長が勝手につけた綽名である。

語源は末端肥大症のアクロメガリーからきている。もっとも三郎は身長は百七十センチで男としてはさほど大きいほうではない。

だが少し注意してみると、全身に較べて手足がいくぶん大きく見える。実際、指を拵げみると、診療所で彼にかなう者はいない。それに足もサイズが二十六と、身長に較べていささか大きい。さらに顔はもともと面長なのだが、顎が少し出ているように見える。横から見ると、いわゆる三日月型に近い。

初め、所長は三郎を見たとき、しみじみ眺めてから、「君は糖尿病はないか」ときいた。もちろん三郎はそんな病気にかかったことはない。首を横に振ると、所長は「ちょっと見せてくれ」と、三郎の手と足を見た。

所長が三郎に関心を抱いたのは、若いとき、末端肥大症の研究発表をしたことがあるからである。所長はさほど勉強したわけではないが、末端肥大症に関してだけはいささか知っていると自負している。

この病気は名前のとおり、体の末梢が大きくなる病気である。原因は脳下垂体からの成長ホルモンが、余計に分泌されるためだといわれている。

これが成長期以前におきると、どんどん大きくなって、いわゆる巨人症になってしまう。相撲やプロレスの選手などには、この種の病気の人がいるともいわれている。

もし成長期を過ぎてからこの病気が起きた場合は、手足とか顔などの先端だけが大きくなる。これが所長の得意なアクロメガリーである。

三郎の場合、はつきりアクロメガリーと診断がついたわけではない。正常の人でも、やや手足が大きかったり、顔が馬のように長い人は結構いる。その人達がすべて末端肥大症というわけではない。

疑問があれば、血液のなかの成長ホルモンの量を調べてみるとはつきりする。肥大症の人は、その量が増えているし、分泌が多すぎて糖尿病とか心臓病などを併発する。

所長が初め、三郎に糖尿病のことをきいたのはそのためである。

もちろん、三郎にはそんな異常はないし、アクロメガリーでもなかった。ただ体に較べて手足がやや大きいというだけである。

大体、人間は奇形に近い部分が一カ所ぐらいあるものだ。

その理屈でいうと、所長は「下垂体性こびと症」になっってしまうかもしれない。

ともかくアクロというの、さほど悪い綽名でもない。第一、アクロメガリーという、なにやら難かしそうな横文字の略で、いわくあり気にきこえる。

さらに手足が他人より大きい、ということは欠点ともい

えない。もつとも足のほうは「馬鹿の足」というが、男ならさして問題にならない。どつしり、足が地についていい、という人もいる。

手が大きいのは断然、有利である。指が長く細い人に器用な人が多いが、三郎もブラモデルを組立てたり、細工したりするのが上手である。メカにも電気にも強いので、診療所のちょっとした壊れものは、みんな一人で治してしまう。

おまけに指が長いので、ピッチャーをやらせるとなかなかうまい。カーブやシンカーも威力がある。

さらには勝負ごとにも便利である。ことに麻雀などで積み込みなどやるとき、長い指の人のほうが有利である。

もつとも三郎は生真面目な男だから、そんなことはしない。ただ一度、やる気になればできます、といって配牌と同時に役満の手を披露したことがあった。それ以来、誰も彼と賭けてはやらなくなったのである。

とにかく万事に器用である。それに研究熱心である。なんでも考えるのが好きな性格らしい。

彼がこの診療所に勤めたのは三年前だった。高校を出てぶらぶらしていたのが、診療所で職員を募集しているのを知って応募してきた。

この診療所は、伊豆の南の小島にあるので、就職希望者は少ない。地名こそ東京都だが、東京から二百キロ以上も

離れていて、直行船でも七時間はかかる。土地の若者は中学を出ると、ほとんど東京へ出てしまう。

それを逆に、三郎は東京からやってきたのである。履歴書によると、東京の下町の高校を出てから、しばらく新宿や渋谷でパーテンをやっていたことになっている。麻雀はそのころ覚えたものらしい。

形だけの筆記試験の成績は拔群だったし、会ってみると、水商売にいたとは思えない真面目そうな男である。

面接した事務長が、「なぜ、離島に勤めようと思ったのか」ときくと、「ただ、なんとなく、きてみたくなったからです」と、答えた。

大体、この男はあまり興奮したり、気負いこむというところがなかった。「採用が決ったらどうするか」ときいても、「暢んびりやろうと思っています」と答えただけだった。

島にきたときはもちろん単身であった。診療所の職員が迎えに出ると、ショルダーバッグに推理小説を数冊と下着を詰めてきただけだった。

この診療所は、医師はヒゲの村木所長一人である。一時は内科の医師と、月に二度、東京の大学から産婦人科の医師もきていたが、いずれも一年で辞めてしまった。

東京から船で七時間というのでは、かなりの好条件を出しても、医者のほうが敬遠してしまう。

ヒゲの所長の専門は外科だが、一人ではそんなことをいってられない。島では内科から小児科、ときには産婦人科まで診なければならぬ。もっとも診るといっても、簡単な応急処置をするだけで、手に負えないのは東京か、船で二時間の隣の島へ送ってしまう。

この所長の下に、事務長と事務員が二人、薬剤師が一人、それに看護婦が六人いる。他に賄婦が二人、用務員二人が職員のすべてである。このうち、事務員の一人はレントゲン技師も兼ねている。

診療所では初め、三郎を事務見習としてつかうつもりだった。丁度、女の事務員が結婚して一人欠員ができていたからである。

だが、所長は以前から専属の検査技師が欲しいと思っていた。

医者一人のちっぽけな診療所でも、血液や小水の検査ぐらいはできなければ困る。いままでは、それを看護婦にやらせていたが、あまり信用できない。看護婦は熱心ではないし、そんなことは私達の仕事ではありません、と面白くないような顔をする。

診療所にきて一年間、三郎は事務の見習をしていたが、もの知りで器用なのがわかってきた。頭もいいし、よく気もきく。

そこで所長と事務長が相談して、三郎を検査技師として

訓練することにした。

そのことに三郎も異論はなかった。

「臨床検査提要」という本を与えて教えると、のみ込みは早い。

元来が器用なので、耳朵から血液を採ったり、顕微鏡での血球の数え方もすぐ覚える。

一年ほど経ったところで、三郎は事務をやめて臨床検査専門になり、ついでに他の事務員が片手間にやっていたエックス線撮影もやれるようになった。

いわば臨床検査技師とエックス線技師を兼ねることになったのである。

これで診療所はいくらか病院らしくなったが、正確にいうと、これは法律違反である。

検査技師もエックス線技師も、しかるべき学校を出て、国家試験に合格した者でなければやってはいけない。都会の病院では、各々に有資格者がいて専属にやっている。

だが、離島の診療所ではそんなことをいっていられない。専属の技師は呼んだところでないし、たとえきてもらっても、それほど患者はいないのだから退屈するだけである。

島の診療所では、三郎クラスで充分である。

それに実際やらせてみると、専門の技師と変らない。むしろ器用な三郎のほうが上手だともいえる。

ともかく最終責任は所長がもつ、ということにすれば問題は無い。医師なら、検査技師もエックス線技師も兼ねてやっても違法にはならないのである。

所長は次第に三郎が気に入ってきた。検査の第一歩から教えたので、いわば直弟子である。それに理解が早いし、素直である。

なにかといえば、「アクロ、アクロ」と呼んで任せる。

二年も経つと血液、小水の検査だけでなく、肝臓から腎臓の検査までやらせるようになった。

「うちの臨床検査は、中央の病院に負けはしない」所長はそんなことまでいいだし、ついには手術の手伝いまでやらせるようになった。

もつとも、手術を職員に手伝わせるのは、いまに始まったことではない。いままでも看護婦に糸を縫わせたり、創口を開かせていたことはあった。ときには鉗子で血管を挟ませたこともある。

もともと診療所では大きな手術はあまりない。せいぜい虫垂炎とか、簡単な骨折の手術くらいだが、それでも医師一人では出来ないものが多い。誰か助手が必要である。

これに看護婦をつかうのは、都会の個人病院などでもよくある。執刀者以外なら医者でなくても間に合う。

だが看護婦は女だけに力不足である。それになにかのとき、どうしても動きが鈍い。職業柄、血には慣れていると

いっても、手術に向いているとはいえない。

どうせ医師以外のものに手伝わせるなら、男のほうがいい。

ヒゲの所長は考えて、三郎を助手にした。手術のとき、自分と同じ術衣をきせて手伝わせる。

さすがに三郎はきびきびしていて勘もいい。それに男だと怒りやすい。「あ、駄目だ、もう少し強く」などといつても、すぐそのとおりする。看護婦のようにすねたり、投げだしたりしない。

いまや三郎は診療所ではなくてはならない存在である。検査技師、兼エックス線技師、そして外科医も兼ねている。

もつとも、それでも三郎の公的な立場は事務見習である。その名で、給料は高校出の地方公務員の給料に準じている。

診療所では主婦と、用務員について、安い月給である。

それでも三郎は不満一ついわない。実際それは不満であっても仕方ないことで、違法なことをやっているのだから、それで給料を請求するわけにはいかない。

それより、三郎は検査をしたり、手術を手伝えること自体が楽しい。事務なら机に向かって診療報酬の点数を計算したり、現金収入を数えるだけだが、手術を手伝うのは変化がある。

給料は少なくても、三郎はいまの仕事に満足している。

「今日はお前がアッペをやってみるか」

いきなり呼ばれて所長にいわれて、三郎は目を瞬かせた。

「中学生の男の子だ」

今日の患者は十三歳の少年であった。

昨日からお腹が痛くて、午前中に学校からまっすぐ来て、所長はすぐ虫垂炎と診断した。そのまま少年は病室に休み、母親が呼び出されて手術と決った。

「丁度、二日目で摘りごろだ」

急性虫垂炎は発病して二日目くらいが、炎症をおこして最も大きくなっている。この状態をあれと同様、エレクトオ（膨起）と呼ぶ。

虫垂突起は盲腸部の先にあるが、エレクトオした状態だと、外にとび出ている見付けやすい。したがって摘るのも簡単だし、あとの経過もいい。

この時期を過ぎると化膿し、やがて破れてしまう。こうなると、まわりの組織と癒着し、腹膜炎をおこして難かしくなる。

といって、あまり初期では虫垂が小さくて、見付けるのに苦労することが多い。

「しかし、大丈夫でしょうか」

「なに、かまわん。俺が横についてやる」

所長はいとも簡単にいう。そういわれると三郎もやってみたい気もする。いままですつと所長の助手ばかりであった。

メスを入れ、腹膜を開き、盲腸部を探る。やがて虫垂を摘り出し、根元で切りとつて切断面をまわりからすばめる形で引き寄せる。それら一連の操作は何度も見て、充分すぎるほど覚えている。

これまでも見ながら、自分でもできるような気がしていた。

だが、いざ実際に「やれ」といわれると緊張する。

「お前が、アッペぐらいでできるようになっていないと、俺も暢んびりこの島にいられないからな」

「どうしてですか」

「この島には外科医は俺だけだ。島の人はアッペになれば俺に切ってもらえばいい。だが、もし俺がアッペになったら切ってくれる人がいない」

「……………」

「この島に医者がきたがらないのは、遠いからだけではない。それより自分が病気になる時き助けてくれる医者がいない、それが怖くてこないんだ」

たしかに、この島は海が荒れたら完全な孤島になる。

「でも、僕は医者じゃありませんから」

「だからこつそりやればいいんだ」

ヒゲの所長は励ますように三郎の肩をぼんと叩いた。

少年の手術は午後二時から始まった。

スタッフは所長と三郎、それに器械出しは婦長が担当した。

この「器械出し」という役目は、手術器具の渡し役である。術者の要求に応じて、メスやコッヘルを素早く渡す。このタイミングが合わないと手術がスムーズにすすまない。

大体、術者は手術の創口にばかり視線がいついて、器具のほうはあまり見ていない。「メス」といつても、器械出しのほうに出てくるのは手だけである。その手に器械出しはメスの背を下に、先端を自分のほうに向けた形で渡す。万一、これを逆に渡すと、術者の掌を切ることになる。これで怪我をした外科医もいる。

コッヘルやペアンなども、握るほうを先にして渡す。ペタランの看護婦になると、この渡すタイミングが見事である。術者が「メス」というと同時に、手にびたりとメスが渡される。このとき、器具が術者のゴム手袋に当って「びしっ」と音がする。これが手術場の緊張感を引き立てて心地よい。

器械出しを長年やっていると、手術の手筈はほとんど覚

えているので、次に術者がなにを要求するかわかっている。予じめわかつていなければ、このようにスムーズに器械を渡すことはできない。

婦長はこの診療所に勤めて二十年になる。もともとこの島の人で、高校を終えてから東京の高等看護婦養成所にゆき、卒業後東京の病院で二年ほど勤めてから、この島に戻ってきた。

島の小学校の先生と結婚したのだが、四年前に夫を病気で失ってから、ずっと一人である。もう四十半だが、診療所では高看の資格をもっているただ一人の看護婦である。

他の五人はいずれも、中学か高校を出ただけの見習である。

島を出て、都会で看護婦の資格をとると、絶対といつていいほど島へは戻ってこない。いまのままでは診療所の看護婦不足は永遠に解消されない。

たまりかねた事務長は、最近、卒業したら島へ帰ってくる、という条件つきで奨学金を出すことを提案したが、村の財政難でまだ陽の目を見していない。

婦長は正看で東京の総合病院にもいたことがあるということで、この診療所では貴重な存在である。彼女が陰で「副院長」と呼ばれているのも、ここでは所長に次いで、実力があるからでもある。

この婦長の器械出しの他に、手術になるといま一人、「雑役係り」というのが必要になる。この係りは、手術衣を着ていない。普段の白衣にマスクだけつけて、外まわりの仕事をする。

たとえば、術中に患者の血圧を測ったり、点滴の具合を見たり、医師の指示で注射をうったりする。その他、麻醉のときに、動く患者をおさえたり、血のついたガーゼを回収したり、その他、もろもろの仕事をするので、この名前がある。

今日の雑役係りには四人の見習のなかでは、経験の最も深い、鈴木明子が当たっている。彼女はこの病院に勤めて三年目で、見習としては最も古い。

このまま診療所においても仕方がないので、東京のほうの准看護養成所にゆきたい、というのを、もう一年だけといって、ひきとめたのである。

あとの村瀬洋子と川合智恵子は、手術中も外来に残っている。

診療所は原則として、外来患者は午前中に診ることになっている。午後は比較的暇である。したがって手術や検査は主に午後にする。それでも、ときどき患者がくる。主にガーゼ交換とか、薬をもらうといった簡単な患者だが、それに対応しなければならぬ。

さらに診療所には、病室が四つあり、十人の入院患者が

いる。もつとも入院といつても、大半が老人で、血圧が高いとか、糖尿病、リウマチといったあまり変化のない患者ばかりである。若くて働きざかりというのは、三号室に入院している右足を骨折した、雑貨店の主人くらいのものである。

これらの入院患者の世話までやると、やはり二人の看護婦くらいは必要である。

かくして、婦長以下五人の看護婦というのは、診療所を維持していくに、必要最低数で、これ以上は一名も減らすわけにいかない。

いまや、看護婦の定着と、補充が、事務長の主要な仕事の一つにもなっている。

无影燈に照らし出された手術台の上で、少年は下腹部を見せて横たわっている。

あらかじめ低比重液による腰椎麻酔をされているので、頭を低くして、お腹のほうが少し高くなっている。

消毒のあと、ハイポ・アルコール液で拭かれた少年の腹は、白く細っそりとしている。

所長はその白い腹の右下部分にメスの背を走らせた。すぐ爪先で引っ掻いたような赤い痕が、浮かび上る。

「ほら」
所長がメスを三郎にさし出した。三郎が戸惑っている

と、院長が赤いメスの痕を示した。

「このとおりに……」

やれ、ということだが所長はあまり具体的にいわない。はつきりいつて少年にきかれるとまずいからだ。

三郎はそろそろとメスを手にとった。

「しっかり張って」

所長が指で、少年の腹の皮膚を引いて左右に張らせた。

三郎はゆっくり赤い痕の上端にメスの先を当てた。

「待て」

所長は皮膚を張っていた手を緩めると、三郎からメスをとりあげた。

「こう……」

人差し指をメスの背に当て、拇指と他の三本の指で両側をささえる、メスの正しい持ち方を教えてから、また三郎に渡す。

「そのまま、ぐいと」

いわれて三郎はメスを皮膚におし込んだ。どうなってもいい、どうせ所長がいるのだ、そんな少し開きなかつた気持でメスをさし込み、そのまま一気に走らせる。

かなり大胆に切ったつもりだが、創痕は浅く、左右に波打っている。それでも、一部深く切りこんだところから、早くも血が滲んでくる。

「もつと……」